

1 研究の内容

(1) 部会テーマと全体テーマとの関わり

家庭科部では一昨年度から本校の全体テーマが「学びをあむー新領域『てつがく創造活動』を中核とする教育課程の開発ー」となったことに伴い、部会テーマを「生活の探究からあみ直しへ」としている。

全体テーマの「学びをあむ」とは、自分の思いを大切に、様々なひと・もの・こととかわりながら新たなものを創り出し、自己を更新していくようなプロセスを指す。編み物は何度でもほどこいて自分の思い通りの形に編み直すことができるように、家庭科の学習においても子どもたちに、自分なりのめあてを持ち、柔軟に修正を繰り返しながら、自分の力でよりよい生活を探究し、創造していける力を育てていきたいと考えた。

図1に、家庭科における探究のイメージを示した。家庭科における生活の探究は、まず生活を見つめ直し、学習の課題を見出すことから始まる。そして、あみ直す、とは、見出された課題を解決するために、自分なりに解決の方法を考えたり、それらを友だちと交流することで新たな発想を得たりして、計画し、実行してみることである。生活の中の課題を解決する方法は唯一ではなく、ある人にとっては有効な手段もほかの人にとってはそうでないことも多い。最短で最良で唯一の正解を求めるのではなく、あれこれ試しながら、より自分にあった方法を探りながら工夫し、失敗も楽しめるような探究活動になるとよいと思う。

このとき、解決の方法を多様にし、主体的に生活を創造していくためには、子どもたちができることを増やしておくことが重要であると考えている。そのため、裁縫や調理の実習では、子どもたち一人ひとりが確実に技を身につけることを大切にしながら、授業実践に取り組んでいる。

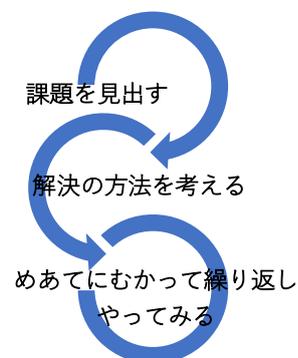


図1 家庭科における探究のイメージ

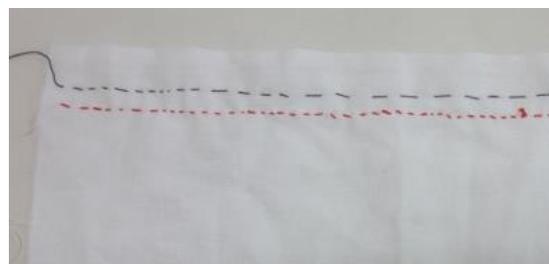


写真1 なみ縫いの縫い目に成長が見える

(2) 今年度の研究の重点

① 昨年度の実践から得た成果と課題を生かす

昨年度は、新型コロナウイルスの感染の影響で、研究としてメインの活動と考えていた調理実習ができなくなり、教師自身が家庭科をあみ直すことが求められた一年となった。具体的には、てつがく創造活動の目標である、「主体的な探究の姿勢や、社会の変化と向き合い、よりよく生きるための市民性を育む」ことを意識し、家庭科の学習でSDGsを取り上げたり、関連して低学年とかかわる活動を行ったりするなど、新たな題材の開発に取り組んだ。

SDGsを取り上げた授業実践では、今、地球規模で起こっている問題を知り、自分の生活の善し悪しだけにとどまらない、より広い視野で生活の実態を捉え、「家庭生活における課題発見と解決の学び」(平成29年学習指導要領)につなげる試みを行った。子ども達は、題材に対して意欲的に向き合い、授業後の行動や意識にプラスの変容があったことも明らかになった。¹

昨年度の実践から得た成果と課題から、今年度の研究に生かしたいことは次の三点である。

一点めは、じっくりと時間をかけて持続可能な社会の実現に対する意識を醸成することである。SDGsに取り上げられている課題は、今の紛れもない現実であるが、子どもたちには遠い世界で起こった他人事と捉えられがちである。これらを自分の身に置き換えて考え、他者の思いに寄り添ったり、自分なりの意見を持ったりできるようになるには時間が必要である。限られた時数の中では、単発の題材としての授業実践ではなく、年間を見通した題材配列の中で折りに触れて取り入れていくことが有効である。

二点目は、焦点を絞ったテーマについての授業を実践してみることである。昨年度はSDGsの全体像を捉えた授業実践としたが、今年度は、テーマを一つ決めて、その課題解決に向けて、未来をよりよくする提案を考えたい。昨年度の実践から、子ども達は友だちとの交流に学びの意味を見出していることが明らかになった。問いを分かち合い、互いの考えを聞き合いながら、ひとつのテーマについて考え合う経験をさせたいと考えた。

三点目は、子どもたちに価値判断のもととなる感性を育みたいということである。それは昨年度SDGsについての授業実践を行なった際、17の目標が示すいくつかの課題に対して子どもたちの間で「そのことをなんとか解決していきたいよね」という意識が共有されなかった経験があったからである。

例えば、循環型社会への意識である。現代の日本は未だ大量生産、大量消費社会であり、私たちの生活には、消費の部分だけが切り取られて目の前にある状態である。しかし、実際には、もともとの原料があり、その原料には命があり、加工、流通、消費、廃棄というプロセスが存在する。その流れを学習の中で気づかせ、子ども達の感性にアプローチしていきたい。

桑子(2001)は、感性を「自己と自己、自己と他者、自己と物など自己を取り巻く環境との関係性創造能力であり、価値判断能力である。」と捉える。これは、どうしたら自分や家族、あるいは地球にとってよりよい生活になるか、を考える家庭科において根幹となる力である。

② 家庭科で育みたいメタ認知スキル・社会情意的スキル

本校の研究開発課題は、新教科「てつがく創造活動」を中核に据え、メタ認知スキルや社会情意的スキルを育成する教育課程の開発である。今年度は、主体的な学びを支えるメタ認知スキル、社会情意的スキルを、教科においても重点化して研究することになった。そこで、改めて家庭科で育みたい力を、メタ認知スキル、社会情意的スキルという視点で捉え直してみることを試みた。(表1)

表1 主体的な学びを支える力(メタ認知スキル、社会情意的スキルへの着目)

	メタ認知スキル	社会情意的スキル
個による 学びの場面	自分や自分の生活を見つめ課題を見出すことができる	粘り強くかかわり最後まで取り組むことができる
協働的な 学びの場面	学習を生活に生かすことができる	没頭できる・楽しめる
	友だちとの違いを取り入れ、よりよさを探究することができる	みんなのために今、自分ができることを考えて、実行できる

先に述べたように、家庭科部のテーマにある生活の探究は、自分の生活を見つめ直すことから始まるが、それはすなわち、自分の生活を立ち止まって省察することである。そして家庭科の学習を生活に生かすとは、身につけた技や、学習を通して気にするようになったことは何かを意識化して行動することである。自分にとっての当たり前を学習の中で表出し、友だちと交流することで、“よさ”が固定化されることなく“よりよさ”の探究、生活のあみ直しへとつながっていく。このように、学びを生活に生かす家庭科の学習過程そのものにおいて、メタ認知スキルは育まれると考える。

一方、家庭科の実習は、イメージする完成像を自分たちの手で作っていく活動であるが、完成するためには自ら取り組もうとする意思と粘り強さが求められる。子どもたちの中には、裁縫や調理などの実習に夢中になる子は少なくない。それは、初めて扱う道具や生の材料に触れ、本気で活動する中に、

普段の学習では味わえない危険や身体性、がんばれば乗り越えられそうな壁、といった遊びの要素が含まれているからではないかと考える。

実習は、協力、周囲の手助けや刺激といった学習空間の影響も色濃く受ける。互いに助け合ったり、友だち同士作品を見せ合いながら、真似をしたり、違いを面白がりながら工夫をしたりすることで、子ども達の作品や活動は豊かになる。

2 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

(1) 持続可能な社会へのまなざしを育むカリキュラムへ

① 題材について

1 (2) ①で述べたように、持続可能な社会の実現への意識や価値判断のもととなる感性を育むには、年間のカリキュラムを見通して、既存

の学習内容に関連する題材を配置構成していくことが有効であると考えた。現5年生には、まず、3学期に予定しているはじめての調理実習と関連させ、食品ロス削減の戦略を考える授業を行なった。さらに3学期には、エシカル消費について学んでいるお茶の水女子大学附属高等学校の生徒と児童労働をテーマに連携授業を予定している。これらを、商品を選ぶ時の視点について考えさせる消費分野の授業につなげていく計画である。

写真2 食品ロスについて話し合う



② 題材名「食品ロス削減をめざす子ども戦略会議」—はじめての調理実習に向けて考えたいこと—

③ 学習指導計画（授業として全5時間）

- 第1次 調理実習で出た食品ロスについての話や、食品ロスの現状、食品ロスが地球に与える影響を知り、食品ロス削減への意欲を持つ。(1時間)
- 第2次 学級の7つのグループで、農家、食品製造会社、スーパーマーケット、レストラン、学校、家庭、消費者を分担して担当し、それぞれの視点で食品ロスを最小限に抑える戦略を考え、発表資料を作る。(家庭学習)
- 第3次 それぞれの戦略を発表しあい友だちの発表の中でイチオシの戦略はどれか考える。(3時間)
- 第4次 友だちの発表を踏まえ、国や自治体はどのような戦略を立てるのがよいか話し合う。(1時間…本時)

④ 本題材のねらい

- ・食品ロスの現状を知り、削減の戦略をさまざまな視点から考えることができる。
- ・友だちの発表を聞き、そのよさに気づくとともに、調理実習や自分たちの生活に生かそうとする意欲を持つことができる。

⑤ 子ども達が考えた戦略の例

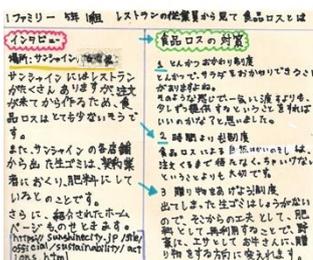


写真3は、レストランの視点で戦略を考えた子どもの発表資料である。「とんかつおかわり制度」「時間よりも！制度」「贈り物をあげよう制度」などネーミングにこだわったため、聞いている子ども達もどのような内容なのか興味を持ち活発な対話となった。「とんかつおかわり制度」というのは、とんかつ屋でおかわり自由のキャベツのように、提供する量を少しにして、さらに食べられる量だけ追加注文できるようにする、という戦略である。

写真3 発表資料の例

この発表のよさを捉えた子どもは、ふり返りに次のように書いた。

レストランのどんかつおかわり制度がいいと思いました。なぜなら一気に食べ切れるか分からない量を一気に食べるよりも少しずつ食べた方が、食品ロスが減ると思ったからです。

(2) 価値判断のもととなる感性を育むものづくり

① 題材について

先にも述べたように、課題解決の方法を多様にし、主体的に生活を創造していくために、裁縫や調理の実習では、子どもたち一人ひとりが確かな技を身につけることを大切にしながら授業実践に取り組んでいる。ものを作ることができるようになり、ものづくりの過程を知ることで、子どもたちに達成感や自信、ものへの愛着心が生まれる。そのプロセスに自分なりの思いを反映できるようになると、工夫によって出来上がりに違いができることを楽しめるようになり、自分の力で生活をあみ直すことができるようになる。裁縫や調理実習には、生活していく上で自分と自分を取り巻く人やものに対して配慮するといった価値観、感性を育む大事な要素が含まれている。



写真4 針さしの作品例

5年生で初めて針と糸を使って作る作品には、自分が使う針さしを取り入れている。(写真4)裁縫をするたびに使うものなので、使い心地をいつも確かめることができる。使っているうちに糸がほつれてくると、自分で修理し、そこで自分の成長を確認する姿も見られる。

② 題材名「針さしを作ろう」

③ 学習指導計画（授業として全8時間）

第一次（基礎縫い）：針と糸を使って、玉どめ玉結び、なみぬい、ブランケットステッチに取り組む。（4時間）

第二次（作品作り）：自分の針さし作りに取り組む。（4時間）

④ 本題材のねらい

- ・針と糸を使って基本的な縫い方ができる。
- ・自分なりに工夫をしながら、針さし作りに主体的に取り組む。

⑤ 作品に表れる子どもの成長

全ての子どもが最初から意欲的に学習に取り組んでいたわけではない。例えば、写真5に示したA児は、授業開始当初「家庭科イヤ、苦手」と大きい声でつぶやいたり、ふり返りに「いっしゅんやる気力がなくなった」と記述したりするなど、課題から逃げる姿勢を隠すことなく見せていた児童である。



写真5 A児の作品

しかし、基礎縫いを終了し、作品作りに入るとにわかにやる気を見せ、1学期の最終授業日には、自分の好きなキャラクターの図案を準備してきた。特に、目をどうやって作り上げるかに没頭し、何度も目玉の入れ方を試しながら、思い通りの仕上がりになり満足そうな表情を見せていた。この後、家族の誕生日に家族が好きなサッカーボールのボタンをつけた手作りのティッシュケースを作って渡すなど、学習したことを生活に生かす姿にも成長が表れている。

4 今後に向けて

今年度、家庭科で育みたいメタ認知スキル・社会情意的スキルは何かと考えていく中で行き着いたところは、子どもたちに家庭科の学習を通して最もどのような力を身につけさせたいのか、という根源的な問いであった。これまで述べてきたように現段階での答えは、価値判断能力としての感性を育てるこ

とである。そして、どうしたら皆のために、環境のためによりよい生活になるかに価値をおいて判断し、行動できるような実践力を身につけることである。

今年度の授業実践で取り上げた2題材は、内容的には関係のないように見えるが、子どもたちに家庭科で育みたい力という根底のところまで繋がっている。具体的に今後は、家庭科で育みたいメタ認知スキル・社会情意的スキルについての考察を深め、限られた時数の中で、持続可能な社会の実現へのまなざしをいかに育んでいくか、家庭科2年間のカリキュラムを構成していくことが課題である。(岡部)

(引用・参考文献)

井出留美(2021)「捨てられる食べものたち 食品ロス問題がわかる本」旬報社, 桑子敏雄(2001)「感性の哲学」NHKブックス, 小林富雄監修(2020)「知ろう!減らそう!食品ロス」小峰書店, 文部科学省(2018)小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 家庭編, PERL「“Food for Thought”責任ある持続可能な生活 アクティブメソドロジー・ツールキット10」

¹ 授業実践の詳細は、研究紀要に詳述。